

個展 《Painting 2020》

国際ファッション専門職大学
今村 淳

本報告は、筆者が2020年7月1日から同月11日まで東京・南青山にあるギャラリーストークスでおこなった個展に関する報告である。今回個展を開催したギャラリーストークスは、鈴木孝史（国際ファッション専門職大学教授）がマネージメントをしているギャラリーである。本個展のタイトルである《Painting 2020》は、今回の開催時期と深くリンクしている。もともと個展にむけて準備をしていたコンセプトは開催時期が近づくにつれて変わっていった。2020年初頭に本個展の承諾を得た時点では、とても今のコロナ禍の状況を想像することができなかったからである。

本個展の出品作品は、筆者が長年制作（研究）してきた《Digital Image Painting》という美術作品シリーズである。過去に開催した個展も全てこの《Digital Image Painting》シリーズの作品を展示してきている¹⁾。後に詳述するが、《Digital Image Painting》とは、多様化する情報化社会における人間の生をテーマにしたシリーズ作品である。したがって、コロナ禍が拡大する社会状況において、展示作品のコンセプトも必然的に変わっていったのである。

筆者は、2020年3月頃から本個展のための作品の制作をスタートしたのだが、周知のとおり4月7日に東京を含む7都道府県に緊急事態宣言が発令された。不要不急の外出を控える要請は現在（2020年8月）よりも強く、新宿の制作場所へ向かう回数も制作時間も少なくなっていた。まさしく長年制作を続けてきたなかで初めての経験であっ

た。このような状況下で、筆者は《Digital Image Painting》シリーズの原点に戻り、再スタートを図る一つの機会と捉え、《Painting 2020》のコンセプトを生みだすに至ったのである。

前置きが長くなってしまったが、《Painting 2020》のコンセプトについて、本個展用に作成したコンセプトペーパーを以下に記しておく（ただし参考文献の注釈は本報告に際して付け加えたものである）。図1～2、写真1～2と併せて見ていただきたい。

本作《Painting 2020》の下図になっている絵は、ドイツの画家ヨーゼフ・カール・シュティラー（Joseph Karl Stieler, 1781-1858）が描いたベートーヴェンの肖像画である。この絵は、ベートーヴェン本人を目の前にして描かれた唯一のものとして知られており、この作曲家のイメージ像を現代へと伝える重要な「情報」として捉えられるだろう。私は2000年にもこの肖像画を下図にして《Painting (No.587)》という作品を制作した。この作品は、「フィリップ・モリスアート・アワード2000」に出品したもので、その前年の1999年より制作を開始した《Digital Image Painting》シリーズの一つである。

《Digital Image Painting》とは、デジタルカメラやインターネットなどから得た画像をプリントアウトし、その上にその画像を油彩で忠実に「上描き」した作品である。この上描きは、「下描き」（あ



図1 《Painting 2020 (DM Version)》
紙に油彩、88 × 124 cm、2020年



図2 《Painting 2020 (River)》
紙に油彩、124 × 88 cm、2020年



写真1 展示風景 (2020年7月1日筆者撮影)



写真2 展示風景 (2020年7月1日筆者撮影)

るいは「完成図」)を他者に委ね自己を主体とせず行う表現といえる。これをデジタル社会における自己(人間)の生のあり様そのものとして、私はこの行為=表現を現在も続けている。《Painting》は、A4サイズにプリントアウトしたシュティラーのベートーヴェン像を油彩で忠実に「上描き」し、その絵をデジタルフォトプリンターで拡大出力(227 × 169cm)した作品である。このような制作工程を通して、ベートーヴェン像への強い偏愛を「上描き」という行為とし

て表現し、その行為=表現を、拡張され量産される情報化社会に生きる人間の生のあり様そのものとして作品化した。

それから20年後の2020年、シュティラーのベートーヴェン像を再び取り上げた。

哲学者テオドル・W・アドルノ(Theodor Ludwig Adorno-Wiesengrund, 1903-1969)のいう「伝統的な形式から自由に再構築された」[アドルノ1997: 96]、ベートーヴェンの作品は、現代においても、愛、歓喜、自由などに

象徴される人間の生を代弁しているといえるだろう。1989年のベルリンの壁崩壊の際には、ベートーヴェンの交響曲第九番が「自由への讃歌（Ode an die Freiheit）」の象徴として、レナード・バーンスタインの指揮によって演奏された（1989年12月25日）。アドルノは、「芸術は仮象として、芸術において社会的現実が出現するなら、その現実により虚像として罰せられるが、それは逆に芸術をして、現実の境界を乗り越えさせる点でもある。芸術はこうした現実の欠陥、苦悩のためにこの世に呼び出されたものなのである」[アドルノ 1997: 74]と述べている。2000年に制作した《Painting》では、情報が加速化する現代社会のなかで、その「虚像」を讃美し、そこに没入する人間の生を「仮象」（＝芸術）そのものとして表現した。

そして、今年（2020年）に起こったコロナウィルスによる未曾有の大事態は、人間の生＝芸術表現として制作を続けてきた私に《Painting》との邂逅をもたらした。この世界中で生命の危機をおよぼす社会的現実の出現により、芸術はまさしく仮象であり虚像として罰せられるのである。私は《Painting》から20年後の本作《Painting 2020》において、この現実の欠陥、苦悩のなかにおける芸術の欠陥、苦悩へとたどり着いたのである。これはまさにカオスのなかのカオスなのである。

本個展では、計9点制作した《Painting 2020》のうちの4点とともに同作から自然派生したともいえる《Painting 2020 (Sky)》、《Painting 2020 (River)》と題する作品も数

点展示した。さて、コロナ禍の収束が見えないなか個展は予定通りスタートしたのだが、社会状況はまさしくカオス化していったといってよい。ここで感染者数のみ記してコロナ禍の状況を述べるのは正確さを欠くと思うが、東京の新規感染者の数を見ると本個展初日の7月1日が67名、最終日の11日は206名であった（ちなみに現在までの1日の最多数は472人である）。開催期間中に倍以上の感染者数が増えていくなかで、やはり来廊者数は思わしくなかったが、本学教員の方々および本学学生も含め来廊くださった皆様には感謝の言葉しかない。

ここ数年、毎年個展を開催しているが、今回改めて「人間の生＝芸術表現」の意味を問う機会になったことはいうまでもない。危機的な社会状況のなかで芸術の存在とは何か。それはまさしくアドルノによる「現実の欠陥、苦悩のためにこの世に呼び出されたもの」であるといえるが、本個展のコンセプトである、コロナ禍の世に呼び出されたことによって表出する「芸術の欠陥、苦悩」のために、この世に呼び出されるものとは何であろうか。今回の個展の課題である。

<注>

1) 近年では、2018年7月19日から8月2日まで東京銀座の中川画廊にて個展《12 gaze——12のまなざし》を、2019年11月23日から同月29日まで東京銀座の書画画廊にて個展《Guardians》を開催した。展示作品等は筆者のホームページ（<http://www.junimamura.com>）を参照されたい。

<参考文献>

アドルノ、テオドール・W 1997『ベートーヴェン——音楽の哲学』大久保健治訳、作品社。